

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	中国北方辺境地域の国際婚姻に関する研究：内モンゴル東部盟市を中心に
Author(s)	温都日娜,
Citation	広島大学大学院人間社会科学研究科紀要. 総合科学研究, 3 : 95 - 105
Issue Date	2022-12-31
DOI	
Self DOI	10.15027/53581
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053581
Right	掲載された論文, 研究ノート, 要旨などの著作権・著作権は広島大学大学院人間社会科学研究科に帰属する。©2022 Graduate School of Humanities and Social Sciences, Hiroshima University. All rights reserved.
Relation	



中国北方辺境地域の国際婚姻に関する研究 —内モンゴル東部盟市を中心に—

温都日娜

広島大学大学院人間社会科学研究科/中国内蒙古大学民族学与社会学学院

Research on Transnational Marriage in Cross-Border Regions of Northern China: Taking the Eastern Inner Mongolia as an Example

WENDURINA

Graduate School of Humanities and Social Sciences, Hiroshima University
School of Ethnology and Sociology, Inner Mongolia University

Abstract

The city of Hulunbuir and the Hinggan League in eastern Inner Mongolia straddle the borders between China, Russia and Mongolia. Transnational marriage has become a common social phenomenon in these multi-ethnic, multi-cultural zones. This study provides a preliminary analysis of the existing status and factors that contribute to transnational marriage in the region using the methods of literature, interview, and observation for data collection. The findings reveals that the transnational marriage in this region are mainly related to citizens of Japan, South Korea, Mongolia, the United States, Russia, Vietnam, Canada, Australia, the United Kingdom and other countries, showing complex regional and gender differences. The contributing factors on the process of transnational marriages is both direct and indirect. The current state of transnational marriage in northern cross-border regions is mostly shaped by the shared cultural traits of the neighboring ethnic groups, the attractiveness of different cultures, and the impact of economic gaps. Through the analysis, the author highlights the instrumentalist consideration, and the decisive effects of cultural and economic influences in the cross-border marriages.

Keywords: Transnational marriage, cross-border regions, ethnic groups, Eastern Inner Mongolia

一 研究背景と問題意識

現代社会のグローバル化により、人々の諸活動は国や地域などの境界を越えて行なわれるようになり、それにともない他国や他地域の人と出会う機会が増え、婚姻の国際化も進んできた。1980年代以降、中国の改革開放に伴い、文化、経済、政治などの領域での国際化が進み、国際婚姻は珍しい社会現象ではなくなってきた。

中国国家統計局のデータによると、国際婚姻の登録件数は、1985年に2.22万件、1995年に4.40万件、2005年に6.43万件、2015年に4.82万件、2020年に1.74万件だった¹。国際婚姻の登録件数は、1985年から2006年まで増加する一方で、その後は小幅な増減を繰り返してきて、登録件数は1995年～2019年に年間4.12万件以上だった。

また、中国の陸上国境の長さは22,117kmあり、北朝鮮、ロシア、モンゴル、カザフスタン、キルギスタン、タジキスタン、アフガニスタン、パキスタン、インド、ネパール、ブータン、ミャンマー、ラオス、ベトナムの14カ国と国境を接している。中国の海岸線の長さは18,000km余りで、海上で接する隣国は北朝鮮、韓国、日本、フィリピン、マレーシア、ブルネイ、インドネシア、ベトナムの8カ国である。

本研究で対象とする内モンゴル自治区は中国の北方に位置し、人口は2404.9万人、モンゴル、漢、ダウール、エヴェンキ、オロチョン、満、朝鮮などの43の民族が居住している²。内モンゴル自治区に19ヶ所の口岸³旗県があり、ロシアとモンゴルとの国境線は4221kmあり、口岸旗県の半分が東部の興安盟と呼倫貝爾市に分布している。

では、中国の北方に位置する中国・モンゴル・ロシアの辺境地域ではどの国や地域の配偶者が多いのか、それはいかなる要因によるものであるのか、どのような特徴を有するのであろうか。

本稿は、以上の問題について、文献資料と現地調査で得た資料に基づき、初歩的な検討を行う。

二 中国辺境地域の国際婚姻に関する研究

近隣国との交流が進行してきた中国辺境地域では、国際婚姻が普遍的に見られる現象となり、西南辺境地域の国際婚姻は多いに注目を集めてきた。以下、本論と関連するいくつかの先行研究を取り上げる。

周建新（2002）は、中国とラオス、中国とベトナムの辺境地域における国境を跨ぐ民族の歴史と現状、民族構成、国際婚姻、民族関係、平穩に居住するモデルなどに関して検討した。国際婚姻に関して、歴史的な歩みと現状を述べ、内部と外部の要因、政策と法律に結びつけて、国際婚姻は実質上国境を跨いだ同民族間の婚姻であることを指摘し、国際婚姻がもたらした一連の社会的なマイナス影響を論じ、それらを緩和する対策を検討した⁴。

羅文青（2006）は、広西壮族自治区の大新、龍州、凭祥、寧明、東興の5つの県における各民族の分布状況を詳細に述べつつ、それら地域の国際婚姻が発生している要因、婚姻の形式、もたらした影響、存在している問題や対策に関して初歩的な考察を行った⁵。

王暉と黄家信（2007）は、広西壮族自治区の那坡県百省郷の壮、瑶、苗、彝などの民族の人々の中に一般化しているベトナムから迎えた配偶者女性たちを対象に考察し、その女性たちの経歴や困難な状況を分析した。彼女たちは中国国籍を取得しておらず、ベトナム国籍も自動的に失っているため、現代国家管理体制のもとでは無国籍の違法者となっており、国外退去処分とされる危うい状況にあるだけでなく、非婚状態での出産育児も違法行為となり、社会維持費を納付する責任が問われ、周辺化された新しいエスニック・グループを形成していることを明らかにした⁶。

周建新（2008）は、広西壮族自治区大新県A村を事例に調査し、国際婚姻家族のベトナム系の配偶者女性たち、並びにその子供たちは、文化、社会、法律的な偏見や差別を受け、個人的なアイデ

ンティティと国家的なアイデンティティとの間に曖昧さと揺らぎが起こり、アイデンティティの危機に直面していることを明らかにし、関係機関は留意すべきであると指摘した⁷。

賽漢卓娜(2011)は、日本人男性との婚姻により訪日した中国人女性たちを移民の視点から捉え、日本の都市近郊農村における国際結婚者を対象としてインタビュー調査を行い、日本人の妻となった中国人女性たちの生活経験を分析した。そこで、人口移動のプッシュプル理論の送り出し側のプッシュ要因や受け入れ側のプル要因に着目し、中国から日本へ嫁ぐに至る婚姻動機、送り出し側と受け入れ側での周辺化された状況、外国人嫁になってからの人間関係の変化、準拠集団の結びつきのあり方、次世代教育へ取り込む様式などを通して、その女性たちのライフストーリーと生き抜く「戦略」を明らかにした⁸。

胡源源はいくつかの研究において、日本人男性を配偶者とする在日の中国東北地域出身の女性たちや中国人男性と結婚して中国東北地域に居住する外国人女性たちへの調査を通じて、国際結婚をした女性たちの社会的なネットワークの形成を考察している。胡源源(2016)は結婚移民の流出が中国東北地域にもたらした影響を、「東北型」の「異民族間のトランスナショナルな媒介結婚」の形成メカニズムとその家庭の運営実情の側面から分析した。一方、東北女性の海外流出が常態化したことが同地へ外国人女性を嫁として迎え入れる雰囲気醸成を齎し出した。さらに、多くの女性の移出が現地男性の結婚相手を選ぶ際の基準を変えた。特に結婚に不利な条件下にあった男性が国際婚姻市場に入った。また、東北地域の移民文化が外国籍の配偶者女性たちに緩やかな社会環境を与え、ベトナム嫁を迎えた家族は、親族関係を調整しながらベトナム人女性の実家への支援も行いつつ家庭を築いている、などの現状を明らかにした⁹。胡源源¹⁰(2021)は、日本の農村に嫁いだ43人のインタビュー調査を通じて、多様化し、複雑化したエスニック関係を明らかにした。中国出身の日本人配偶者の女性たちの間で、単一的な纏まった

同胞エスニック関係が結ばれておらず、エスニック関係が世代化されている特徴が現れ、世代間のギャップが顕著である。このような世代化されたエスニック関係は、中国人女性の日本での再社会化の差異、婚姻経歴、中国の出身地などの所属性の多様化、日本社会の変化などが同時に作用して形成したと結論をつけている。

本稿では、先行研究の蓄積を踏まえつつ、現在に至るまであまり注目されてなかった中国・モンゴル・ロシア辺境地域の国際結婚の実情を明らかにしたい。

三 内モンゴル東部の辺境盟市

内モンゴル東部の辺境盟市といえば興安盟と呼倫貝爾市がある。

興安盟の面積は5.98万km²あり、行政区画上、2つの県級市、1つの県・3つの旗を管轄し、モンゴル、漢、回、満、朝鮮、ダウール、エヴェンキ、オロチョン、チベット、彝、ウイグルなどの41の民族が居住している¹¹。西北部に口岸地域のアルシャン市があり、モンゴル国と接している。

興安盟の2021年の総人口は140.54万人、2020年より0.78万人減少し、人口増加率は-0.55%である。都市人口は75.58万人、都市化率は53.8%に達した。2021年の出生人口は8100人、出生率は5.73%、人口自然増加率は-2.49%である¹²。

呼倫貝爾市の総面積は26.40万km²であり、行政区画上、2つの市、5つの県級市、4つの旗、3つの自治旗を管轄し、モンゴル、漢、回、満、ダウール、エヴェンキ、オロチョン、ロシア、朝鮮などの42の民族が居住している。

呼倫貝爾市の2021年の総人口は221.39万人、2020年より2.24万人減少し、人口増加率は-1.00%である。都市人口は165.51万人、都市化率は74.76%に達した。2021年の出生人口は1698人、出生率は5.89%、人口自然増加率は-4.73%である¹³。

呼倫貝爾市の南部は内モンゴル自治区の興安盟、黒龍江省と接し、北部および北西部はロシア連邦、西部および西南部はモンゴル国と接す

る。呼倫貝爾市に、出入国検査場がある口岸地域は七つある。ロシア側と満州里^{マンジョール}口岸、二卡口岸、胡列也^{フレート}口岸、黒山^{フレイト}口岸、室韋口岸があり、モンゴル側と額布都格^{エブデグ}口岸、阿日哈沙特口岸がある。

この辺境盟市の興安盟と呼倫貝爾市の地域は、歴史上行政従属関係が変化してきた。例えば、興安盟の地域は、1907年に黒竜江省に管轄されていた。呼倫貝爾地域は1912年に特別自治区となっていたが、1920年に取り消され、黒竜江省に管轄されていた。満州国時代は、興安盟と呼倫貝爾市の地域に興安総省、興安四省が設置されていた。1945年、中華民国が東北九省を設置したうちの一つが興安省であり、現在の興安盟と呼倫貝爾市の大部分を含めていた。1969年に興安盟の大部分は黒竜江省に編入されたが、1979年に内蒙古自治区に復した。1980年に呼倫貝爾盟と興安盟の2つの盟が設置された¹⁴。また、興安盟と呼倫貝爾市の地域は、各時代にわたって、中国（清、満州国、中華民国）とモンゴル、ロシアの辺境地域となり、多文化共存と多民族混住の状況が進んできた。

四 国際婚姻の現状

民政局の行政的な規則として、興安盟と呼倫貝爾市に戸籍がある人たちは、中国国籍以外の人と結婚する場合、呼倫貝爾市の海拉爾区にある涉外婚姻登録処で登録手続きをする。

国際婚姻の状況を理解するため、筆者は2013～2021年の期間、延べ110日間の調査を行った。主に涉外婚姻登録処を訪問し、国際婚姻登録状況を把握し、国際婚姻者及びその親族、友人を16人訪ね、現地視察も兼ねつつインタビュー調査を行った。

以下、登録処における国際婚姻の統計状況を分析する。

1 国際婚姻の登録状況

国際婚姻登録の件数をみると、2010～2019年の間に合計625件あった。現地の人々は合計25カ国と地域の人々と婚姻登録をしている。

この10年間のうち、2010年に46件、2011年に

78件、2012年に60件、2013年に89件、2014年に57件、2015年に58件、2016年に72件、2017年に54件、2018年に53件、2019年に58件、平均値は62.5件である。10年間にかけて、2010年の46件より2019年の58件となっている。このうち多かった年は2013年（89件）、2011年（78件）、2016年（72件）である。

配偶者の国名・地域名と人数を、人数の多い順に並べると、日本は131人（20.96%）、台湾は94人（15.04%）、韓国は79人（12.64%）、モンゴル国は64人（10.24%）、アメリカは45人（7.20%）、ロシアは43人（6.88%）、ベトナムは31人（4.96%）、カナダは26人（4.16%）、オーストラリアは24人（3.84%）、イギリスは16人（2.56%）、香港は15人（2.40%）、マレーシアは9人（1.44%）、インドは6人（0.96%）、イタリアは6人（0.96%）、カンボジア、フランス、ベルギー、ギリシャはそれぞれ5人（0.80%）、タイ、モロッコ、パキスタン、トルコ、バングラディシュ、デンマーク、スロバキアは合計16人（2.6%）いる。

以下の図1は国際婚姻相手の国籍・地域を示している。

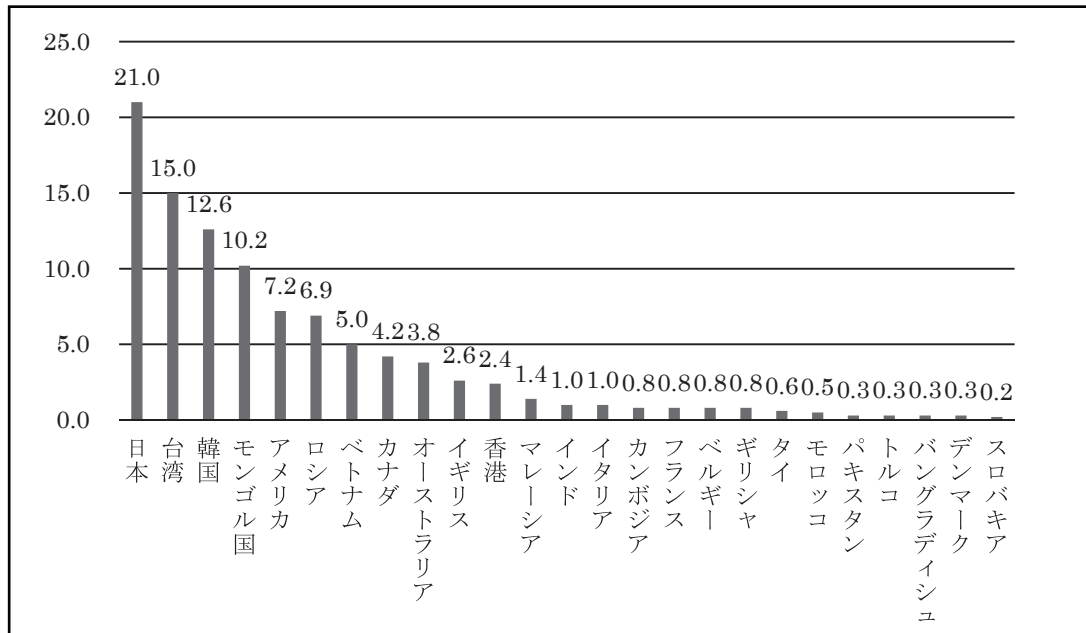
図1が示すように、国際婚姻相手の所属地に顕著な差異が見られる。地域特徴で分けると、日本と韓国を合わせて210人（33.6%）、ロシアとモンゴルを合わせたら107人（17.1%）、台湾と香港をあわせて109人（17.4%）、アメリカ、カナダ、オーストラリアを合わせたら95人（15.2%）、ヨーロッパ8カ国を合わせて42人（6.7%）、ベトナム、インド、カンボジア、タイ、パキスタン、バングラディシュを合わせて54人（8.6%）、マレーシアは9人（1.4%）、モロッコは3人（0.5%）いる。

2 国際婚姻の登録に見える性別と地域の差異

国際婚姻の登録状況には性別的、地域的な差異が見られる。国際婚姻の手続きを行った中国人男女625人のうち、女性は394人、男性は231人いる。

調査地の女性と国際婚姻に登録した男性の中、日本は87人（22.08%）、台湾は73（18.53%）、韓国は62人（15.74%）、アメリカは35人（8.88%）、カナダは26人（6.60%）、オーストラリアは17人（4.31%）、イギリスは16人（4.06%）、ロシアは15

図1 国際婚姻に登録した非中国籍者の国や地域の割合(%)



(出典：渉外婚姻登録処のデータに基づき筆者作成)

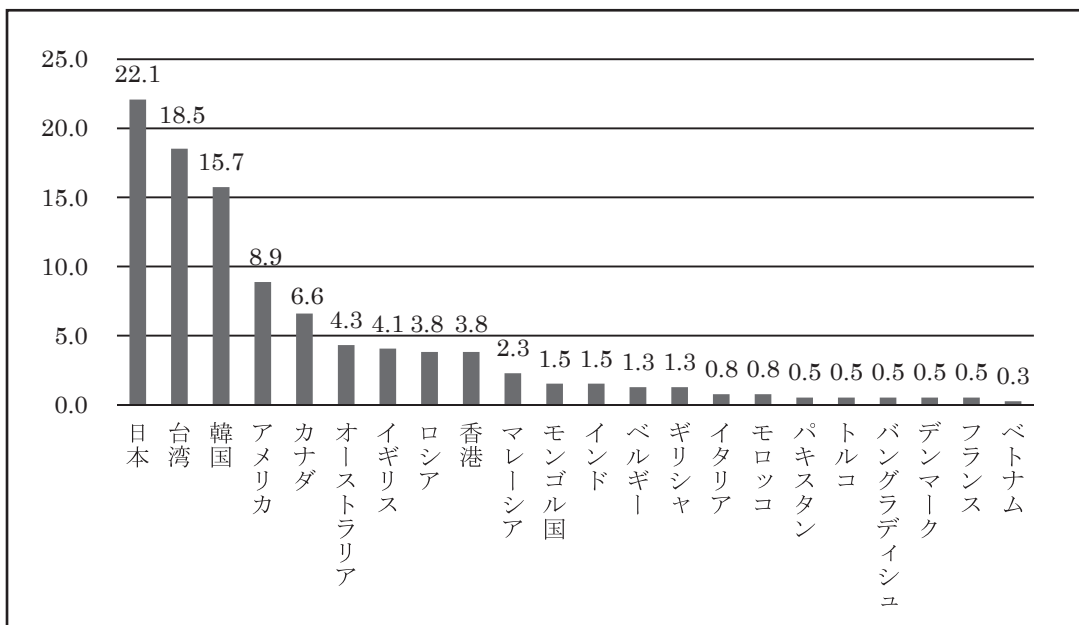
人 (3.81%)、香港は15人 (3.81%)、マレーシアは9人 (2.28%)、モンゴル国は6人 (1.52%)、インドは6人 (1.52%)、ベルギーは5人 (1.27%)、ギリシャは5人 (1.27%)、イタリアは3人 (0.76%)、モロッコは3人 (0.76%)、パキスタンは2人 (0.51%)、トルコは2人 (0.51%)、バングラディシュは2人 (0.51%)、デンマークは2人 (0.51%)、フランスは

2人 (0.51%)、ベトナムは1人 (0.25%) である。

下記の図2は、現地の女性と国際婚姻に登録した男性を国や地域別に示している。

次に、調査地の男性と国際結婚に登録した女性のうち、モンゴル国は58人 (25.11%)、日本は44人 (19.05%)、ベトナムは30人 (12.99%)、ロシアは28人 (12.12%)、台湾は21人 (9.09%)、韓国は

図2 国際婚姻に登録した非中国籍男性の割合(%)



(出典：渉外婚姻登録処のデータに基づき筆者作成)

17人 (7.36%)、アメリカは10人 (4.33%)、オーストラリアは7人 (3.03%)、カンボジアは5人 (2.16%)、タイは4人 (1.73%)、フランスは3人 (1.30%)、イタリアは3人 (1.30%)、スロバキアは1人 (0.43%) である。

下の図3は、調査地の男性と国際結婚を登録した女性の国や地域を示している。

調査地の人と国際結婚を登録した非中国籍の男性と女性の所属地を比較すると、いずれも件数が多いのは日本 (87人、44人) (左が男性数、右が女性数。以下同じ) である。男性が多く、女性が少ないのは韓国 (62人、17人) である。件数は少ないが、韓国と近い傾向にあるのはアメリカ (35人、10人) である。モンゴル国の女性は男性より圧倒的に多い (6人、58人) が、男女の割合的にはベトナムはさらに多い (1人、30人)。カナダの男性の登録件数は日本人男性の半分以下となるが、女性はいない (26人、0人)。ロシア籍の登録者は男性が女性より少ない (15人、28人)、オーストラリアの場合は男性が女性より多い (17人、7人)。イタリア (3人、3人) とフランス (2人、3人)

の登録件数は僅かだが、女性も男性もいる。男性しかいないのはカナダ (26人)、イギリス (16人)、香港 (15人)、マレーシア (9人)、インド (6人)、ベルギー (5人)、ギリシャ (5人)、モロッコ (3人)、パキスタン (2人)、トルコ (2人)、ベンガル (2人)、デンマーク (2人) である。

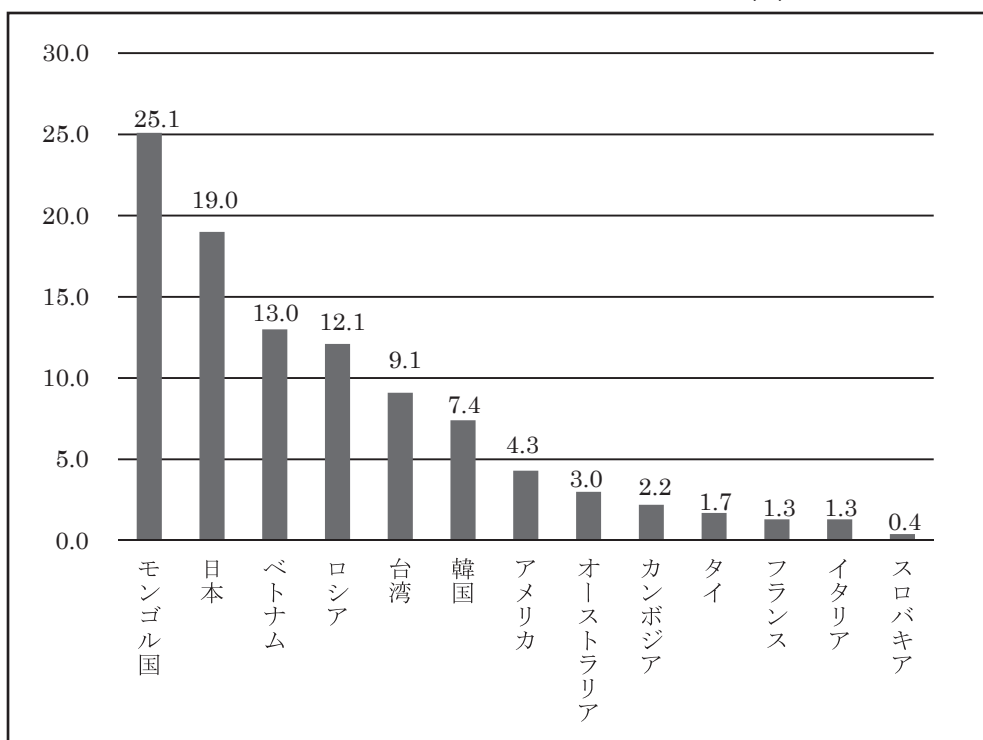
一体いかなる要因に影響されて、上述の北方辺境地域における国際婚姻の状況が形成されたか、以下、現地調査資料に基づいて検討する。

五 辺境地域の国際婚姻に影響を及ぼす要因

1 文化的な共通性

一般に、婚姻家族は社会の基礎的な組織と考えられており、社会の細胞ともいわれる。婚姻は社会的に承認された男女の性的結合であり、特定の規範に基づく同棲関係と経済的な協力を伴う制度である。国際婚姻は国境と文化を超えているが、婚姻成立の際には共通性が基になると考えられる。

図3 国際結婚に登録した非中国籍女性の割合(%)



(出典：渉外婚姻登録処のデータに基づき筆者作成)

中国の北方辺境地域における国際婚姻を促進する重要な要因は、共通の言語、共通の習慣、共通の考え方などの文化的な共通性である。この点はまず、国籍登録上、大陸と別々になっている台湾・香港の出身者との婚姻登録者が一定の割合を占めていることから読みとれる。調査地の民政局でのインタビューによると、「登録上は涉外婚姻になっているが、台湾人と香港人との我が地域の人との文化的な差異は少ない。特に台湾の場合、2015年～2019年の期間、涉外婚姻に登録した男性の6割以上を占めていた」¹⁵。次に、北方の辺境地域に国境を跨って居住するモンゴル、ロシア、朝鮮などの民族がいる。国際婚姻のうち、中国とロシア、中国とモンゴル国、中国と韓国の婚姻の一部は同民族間の婚姻になっている。民政局でのインタビューによると、2015年～2019年の期間の国際婚姻登録者のうち、ロシア民族間、モンゴル民族間、朝鮮民族間¹⁶の登録は少なくとも2割を占めていた」という¹⁷。

インタビューに応じたD氏は、内モンゴル自治区興安盟出身の男性で、大学卒業後1995年からモンゴル国に移住してビジネスをしていたが、2000年にモンゴル国の女性と結婚した。2005年に帰国してからはホテル経営を続けている。子供は息子と娘二人合計2人いる。彼が話すには、「私は中国国籍でない人と結婚したが、自分自身のことを国際結婚者だとは思わない。私の知り合いの中で、このようなモンゴル人とモンゴル人同士、ロシア人とロシア人同士の国際結婚者は5組もいる。どの国籍の人と暮らすかは重要ではなく、幸せになればそれでよい」という¹⁸。インタビューに応じたT氏は中国に居住するロシア国籍・ロシア民族の女性で、漢族の男性と結婚した国際婚姻者である。「私はロシア人で、この地域で生まれ育った。私の夫は漢人で、よく働く勤勉な人だった。10年前に亡くなった。私には息子が二人いる。一人は漢人と、もう一人はこの地域の中国国籍ロシア民族と結婚した。孫はロシア語を習い、大学を出てビジネスをしてきた。2012年からはロシアに行つてビジネスを続け、2014年にロシアの女性と結婚

した。ずっとロシアで暮らしている」¹⁹と漢語で滑らかに話していた。

辺境地域で常に見られる国境を跨いだ同民族間の婚姻は、特殊な現象ではなくなり、文化的な違和感が少ないことから国際婚姻を促す一要素となっており、調和的に共存する一つの形式にもなっている。

2 異なる文化の共存

興安盟と呼倫貝爾市は中国、ロシア、モンゴルの境界に位置し、「鶏の鳴き声が三カ国に聞こえ、ロシア・モンゴルを一望する」という美称があり、さらに日本人の動きも多かった地域である。

1900年頃、満州里の近辺には人口が1万人あり、多数のロシア人、少数のブリヤートモンゴル人、僅かな数の漢人とロシア人の混血者、ロシア人と朝鮮人の混血者が居住していた。1949年頃、満州里や扎賚諾爾^{ジャライノール}辺りにロシア、日本、ドイツ、ギリシャ、トルコ、ハンガリー、ユダヤ人など8000人ほどが居住していた²⁰。1990年、興安盟には28民族の158.27万人、呼倫貝爾市には35民族の251.0万人が居住していた。長期におよぶ混住の過程で民族間の交流も続いてきた。

改革開放後、国際交流が盛んになり、興安盟と呼倫貝爾市は中国、ロシア、モンゴル国との交流の窓口になってきた。1989年に満州里口岸、黒山図口岸、室韋口岸の開放が許可され、1992年に阿日哈沙特口岸、二卡口岸、阿爾山口岸、胡列也図口岸の開放が許可され、2009年に額布都格口岸の開放も許可された。口岸の開設により、三カ国間での物資の輸送、人の移動、資本の投資などが頻繁に行われ、多民族・多文化間の交流が一層盛んになった。満州里市の場合、入出国する観光客が急速に増し、2005年に160.3万人、2008年に182.4万人に達した²¹。

興安盟と呼倫貝爾市の辺境地域の住民にとって、異なる民族・異なる国の人と暮らすことは見慣れてきたこととなっている。口岸地域の商店街で中国、ロシア、モンゴル国で生産された商品が売られてにぎわい、繁華街や広場に大勢の人が集

まって、ロシア語、漢語、モンゴル語、英語などで自由に交流する風景は、国際化した場所であることの証左である。

S氏へのインタビューによると、「私は興安盟出身で、1999年に黒龍江大学を卒業してからいままですずっとロシアとビジネスを行ってきた。私の妻はロシア人で、海拉爾区の「ロシア飯店」で仕事をしている。私たちは同じ大学で勉強していて、大学のイベントで知り合って付き合いはじめ、卒業して一緒にここに移住した。2003年に結婚し、息子は13歳になっている。私達の恋愛や結婚に対して、二人の両親は最初心配していたが、親戚、友人らに反対者はいなかった。妻は、性格が明るく、誠実で、前向きなので、私の友人達ともうまく付き合っている。私たち夫婦は何でも話し合ってから実行し、お互いに支え合ってきた。彼女は我々の地元の女性と違って、要求が少ない。例えば、結婚する方向に進んでいっても、彼女や両親らが結婚式の資金などに全然言及しないので、驚いたぐらいだった。年に一回、子供の学校が休みに入ると、ロシアに出かけて来る。私の結婚生活は幸せで、満足している。しかし、私の同級生はロシアの男性と結婚していたが、2年後に生活習慣や性格の不一致から離婚して、その後ロシアにいる中国人と結婚してロシアで暮らしている。どのようなことも人によって、状況によって結果は違う。外国人と結婚することが良いことだとか悪いことだとか簡単に評価することは、正しくないと思う²²」という。

M氏のインタビューによると、「私は呼倫貝爾^{アムガラン}市の阿木古朗鎮の出身で、5年前からここに来て、特産品の店を営業している。私たちのいるこの興安盟や呼倫貝爾あたりは、建国以前には、日本人が多く住んでいたようだ。90年代に日本人残留孤児として日本に移住した人がいるという話もよく聞いた。新型コロナが発生する前、観光やビジネスや支援活動などで日本人が多く訪れていた。私たちの大学時代は、外国語が選択できていた。先生がモンゴル人は日本語を習得しやすいと言うので、クラス全員が日本語を習った。私の弟は日本

語を専攻した。弟は海拉爾区の旅行会社に勤めていたときに、ある財団の交流プロジェクトで1年間日本に滞在した。その後帰国し、すぐ私費留学生として日本に行った。大学院修士課程を出てから医療関係の会社に就職し、日本人女性と結婚することになった。弟が、発展した経済的に豊かな日本から妻をめとるということは、我が家にとって誇りだった。2010年にこちらで婚姻登録をして、華やかな結婚披露宴も行った。新婦は体が小さく、目が細く、礼儀正しく、穏やかな、可愛いらしい女性だった。残念なことに2年後には離婚した。生活習慣、人間関係、お金の使い方などですれ違いがあったということだ。その後、弟は四川省の女性と結婚して、ずっと日本で暮らしている」と述べた²³。

調査地の国際婚姻の中で、日本人との婚姻登録が多いことは、日本、モンゴル、漢文化の相互の理解があったことと関係すると考えられる。また、辺境地域における中国、ロシア、モンゴル国などの異なる文化はそれぞれの特徴をもって共存している。国際結婚した人々にとって文化の差異は魅力的な要素ではあるが、場合によっては溝を深める要素もある。辺境地域では多文化が接触し、融合しつつある。インタビューに応じた人たちの共通点は、国際婚姻を含む異なる文化をもつ相手との婚姻は、夢物語ではなく、現実における喜びも、悲しみも含むものと理解している。

3 経済的な格差

中国の改革開放の深化に伴い、経済状況の地域的な格差が顕著になり、農村から都市への移動が人口移動の主流となってきた。女性の都市への移動によって、農村の男性は結婚難に陥り、社会的にも研究的にも注目されてきた。経済的な格差は同様に辺境地域の国際婚姻に影響を及ぼしている。上に述べた西南地域を対象とした王暉と黄家信(2007)、周建新(2008)の研究と、東北地域を対象とした胡源源(2016)の研究においても、ベトナム人女性と結婚する事例に着目している。本稿の調査対象地の国際婚姻登録においては、ベトナム

ム人女性は30人おり、結婚登録をした外国人女性の13.0%を占めている。婚姻登録の関係者からも、「涉外婚姻登録者の中にベトナム人女性が見られるようになってきた。登録手続きのために来ても、言葉は一言も話せない。仲介を通じて結ばれるようだが、言葉も習慣も何も分からずにどうやって生活するのだろうと不思議に思う」と述べている²⁴。

インタビューに応じたU氏はベトナム人女性の配偶者について話をした。「私たち農村人は都市の生活に憧れている。ベトナム人が我が国に憧れてくるのも当然だろう。テレビ報道などを見ると、ここよりも貧しいようだ。私の知り合いの中にベトナム嫁はいないが、親戚が暮らすB村にはいた」という。2012年にWさんの35歳になる息子が27歳の若いベトナム嫁を迎えた。仲介を通じて10万円もかかったようだが、登録手続きなどもきちんとしていたためWさんらはホッとしていた。嫁は優しく、よく働かし、中国語の学習もして、村の人々によく褒められていたという。2017年の10月、同じ村のLさんから、「自分の息子が30歳を過ぎていて、ベトナム人女性を紹介してほしいから、あなたの嫁さんに話して、紹介してほしいと頼んだそうだ。Wさんの嫁は快諾してくれて実家に連絡したという。見合いはうまく進み、三ヶ月ぐらいたって、Lさんの息子は6歳年下のベトナム人嫁を迎えた。7万円かかったそうだが、書類を揃えて正式な手続きを終えた。Lさんの嫁もWさんの嫁もよく働かし、二人は村の花だと言われていた。LさんとWさんの家族、親戚たちも彼女らを気に入って、よく面倒をみてやり、皆仲良く幸せに暮らしていた。でも、2018年の4月末にそのベトナム人嫁二人は行方不明になって、いなくなったままだそうだ。農村の人にとって大きな損失で、大きな精神的ショックを受けた。信用できない外人嫁だ²⁵という。

インタビューに応じたA氏はパキスタンの婿について話をした。「私の親戚の娘は西安の大学で学んでいた時にパキスタンの留学生と恋愛関係になり、5年間かけてやっと結婚できた。話によると、

二人は同じ専攻で授業やイベントなどによく一緒に参加し、勉強のことでよく助け合っていたそうだ。彼は背が高く、ハンサムで、優しく、よく頑張るといっているので、好きになったようだ。大学を卒業して二人とも北京にあるIT企業に勤め、忙しい日々を送っている。婿の実家は経済的にはパキスタンで上層に入らないものの、比較的豊かな家族で育った。しかし、パキスタンには一夫多妻制度が残っていて、女性に対する制約も多いと聞いて親戚は皆反対していたが、二人の若者はよく話し合っ、いろいろな問題を解決した。結婚前に彼女の実家にきて登録手続きをして、パキスタンでも結婚式を行った。中国のほうがパキスタンより収入が高く、言葉や習慣の障害もなくなってきて婿さんも安心しているようだ²⁶。

中国の農村の人にとって、農村から都市や豊かなところへ出ていくことは夢である。経済状況が中国より低いところの人々にとって、中国にきて暮らすことは夢となっている。そこで、経済条件のよいところを求めていくことは、経済的な格差が国際婚姻に働きかけている側面を表している。国際婚姻登録には性別的な差異が見られたが、女性も男性も結婚登録後に経済状況がよりよい、より住みやすい環境へ移住することが普通になっている。

六 国際婚姻の直接性と間接性

上述の辺境地域における国際婚姻の成立には、直接性と間接性という二種類の特徴が見られる。

中国が留学生を受け入れることや、あるいは中国にある外国企業が国際婚姻の成立を促していることが今回の婚姻調査から明らかとなった。学生たちは勉強する目的の学校という社会的な組織の空間の中で、同級生や先輩・後輩関係となり、同じ勉強や仕事をする過程で異なる国の若者と接点を有し、相互の理解を深めて、恋愛、結婚に至ることは直接性の基礎がある結婚となる。また、同じ会社などで同僚として働くことは、大学と似たようなところがあり、社会的な組織の空間の中で、

同様な行動をする過程で異なる国々の人が接触し、それが恋愛や結婚にまで至るのも直接性の基礎がある国際婚姻の成立となる。また、出張や旅行などの短い時間で、同じ空間の中であって偶然の機会での出会い、そこから恋愛や結婚まで進展した国際婚姻のケースは、調査地で二件だけであったが、確実に見られた。特に、今日のように交通手段が発達した時代において、国際空港や国際便は人々に特別な出会いの空間を提供している。

もう一つは何らかの媒介を通じた間接的な基礎である。日常生活のなか、知人の紹介からなる見合い結婚は普遍に見られる。調査地域では、留学生や外国と関係がある人の紹介で、外国人と知り合って、恋愛や結婚までいったケースは少なくない。現地では、知人紹介が比較的信頼できる形式として認められている。

電子メディアの発達により、インターネットを通じた恋愛や結婚も現れてきた。中国国内での婚姻のみならず、国際婚姻にも見られる。調査地では、このようなケースは英語が得意な者の一件しかなかった。それは、調査地の男性がネット上で知り合って、二年間ビデオ通話で互いに恋愛感情を抱き続け、二年後に対面を果たすとすぐに結婚した。しかし、半年も経たずに離婚したという事例である。調査地ではこのようなネット式婚姻が信用しがたい形式と理解されている。

最後に、電子メディアの発達や仲介機関の紹介による見合い婚である。中国では社会変化により「結婚難」が発生するとともに、結婚していない「剩男」、「剩女」²⁷が現れ、結婚仲介組織の発展する機会を生んだ。仲介業者は人的なつながりと情報把握の有利な点を活かし、広範囲なネットワークを形成している。仲介組織の紹介による見合いで成立した国際婚姻のケースが確実にあるが、上述のベトナム人妻のような好ましい成果が長期的には継続しなかったケースもある。調査地の一般の人々は仲介組織による見合い婚はリスクの高い婚姻と見なされるようになってきている。

結論

本稿は文献調査、観察調査、インタビュー調査を用いて資料を収集し、中国・ロシア・モンゴルの三カ国の辺境地域となる内モンゴル東部盟市において、国際婚姻の現状や要因について初歩的な考察を行った。

中国の北方辺境地域では、国際婚姻は人々の見慣れている現象となっている。国際婚姻のデータによると、当該地域の人々は主に日本、韓国、モンゴル国、アメリカ、ベトナム、カナダ、オーストラリア、イギリスなどの国々の人と結婚している。国際婚姻のデータに地域差と性別的な差が見られている。北方辺境地域の国際婚姻は、文化の共通性、異なる文化の共存や交流、経済的な格差に作用されて形成している。国際結婚の成立の基層には直接性と間接性が働いている。婚姻データにおいても現実的ケースにおいても国際婚姻はツール化しており、相対性を持っている。経済的な実力と文化的な要素が国際婚姻に強い影響を及ぼしている。国際婚姻のルートとして、人間関係による知人紹介の婚姻が信用され、ネット式婚姻や仲介機関の紹介による婚姻はリスクがある婚姻となっている。

また、婚姻法により、国際婚姻の登録者は、国内で登録するか外国で登録するかのいずれかを選ぶことができる。中国国内の戸籍所属地で婚姻登録をしても、調査地で生活する人は少ない。調査対象地域の人々にとって、国際婚姻登録は豊かな生活を求めて出国する手段となり、人口輸出を促しているところがある。婚姻登録地の選択制度により、国内のみのデータで国際婚姻の全体を把握できない限界もある。

注

¹ 『中国統計年鑑2021』 c22-25 中国国家統計
<http://www.stats.gov.cn/tjsj/ndsj/2021/indexch.htm>
(2022.7.6閲覧)。国際婚姻のことを、中国の婚姻統計において中国国籍者と非中国国籍者の婚姻を涉

- 外婚姻と記す。
- ² 内蒙古人民政府網「改革开放以来内蒙古人口发展变化情况」
https://www.nmg.gov.cn/tjsj/sjjdfx/202111/t20211125_1962053.html (2022.8.1閲覧)。
- ³ 通関手続き地、入国管理事務所のある港などを中国では口岸と称す。
- ⁴ 周建新『中越中老国境を跨る民族並びに民族関係に関する研究』民族出版社 2002.2。
- ⁵ 羅文青「平和と往来：広西边境地域の国際婚姻問題初考」『広西師範大学学报』2006/1、pp.52-56。
- ⁶ 王暉と黄家信「無国籍の女性たち：伝統と現代の間で徘徊するエスニック・グループ」『百色学院学报』2007/1、pp.1-6。
- ⁷ 周建新「中越边境跨国婚姻女性及びその次世代の身分困境：広西省大新県A村を事例に」『思想戦線』2008/4、pp.1-8。
- ⁸ 賽漢卓娜、『国際移動時代の国際結婚』、勁草書房、2011年2月。
- ⁹ 胡源源「中国における国際結婚移民の受容と家族維持戦略：東北地区のH県を事例として」、『21世紀東アジア社会学』2016年8号、pp.107-123。
- ¹⁰ 胡源源「国際結婚移民の“世代化”したエスニック関係—日本農村在住の中国人女性を事例に」『山東社会科学』2021/2、pp.143-149。
- ¹¹ 中共内蒙古自治区興安盟委員会興安盟行政署「中華民族共同体意識の鑄込みを主線に、興安盟民族団結を推進する事業の新章を記譜する」2021-10-12
<https://www.56-china.com.cn/show-case-5129.html> (2022.7.1)。
- ¹² 興安盟統計局2022.4.13「2021年国民経済と社会発展統計公報」
<http://tjj.xam.gov.cn/xamtj/sjfbjyd/tjgb92/5071576/index.html> (2022.7.1)。
- ¹³ 呼倫貝爾市統計局2022.3.23「2021年国民経済と社会発展統計公報」
<http://tjj.hlbe.gov.cn/News/show/927341.html> (2022.7.1)。
- ¹⁴ 内蒙古自治区人民政府地方志研究室「中華民国時代内蒙古の建制沿革」(1)(2)中華民国时期内蒙古的建制沿革2019.5.12、
<http://nmgqq.com.cn/quqinggailan/jianzhiyange/neimengguzizhiqu/13654/13654.html>。
- ¹⁵ z氏 (58歳、男性、漢族)、y氏 (49歳、女性、漢族)、2021年7月20日のインタビュー、海拉爾区。
- ¹⁶ 中国の朝鮮族、韓国人、北朝鮮の人を一括で朝鮮人と呼ぶ。
- ¹⁷ l氏 (55歳、男性、漢族)、y氏 (49歳、女性、漢族)、2021.7.25インタビュー、海拉爾区。
- ¹⁸ D氏 (59歳、男性、モンゴル族)、呼倫貝爾市阿拉坦額莫勒鎮、2019.8.1インタビュー。
- ¹⁹ T氏 (81歳、女性、ロシア族)、呼倫貝爾市滿州里市、2018.9.1インタビュー。
- ²⁰ 滿州里市志編纂委員会編；夏恩訓主編『滿州里市志』、内蒙古人民出版社、1998.12、pp.217-218。
- ²¹ 滿洲里市旅行局統計、滿洲里旅行局、2020年8月2日収集。
- ²² S氏 (45歳、男性、漢族)、呼倫貝爾市海拉爾区、2018.9.2インタビュー。
- ²³ M氏 (59歳、女性、モンゴル族)、2021年8月5日、興安盟阿爾山市インタビュー。
- ²⁴ l氏 (55歳、男性、漢族)、y氏 (49歳、女性、漢族)、2021.7.27インタビュー、海拉爾区。
- ²⁵ U氏 (56歳、女性、漢族)、2019年8月10日インタビュー、興安盟烏欄哈達市。
- ²⁶ A氏 (52歳、女性、漢族)、2018年8月20日インタビュー、呼倫貝爾市の滿州里市。
- ²⁷ 中国で結婚適齡が過ぎても結婚していない男性を「剩男」、女性を「剩女」という。結婚しなく、独身で残ったことを意味する。
- ※本研究は中国教育部留学基金委の助成を受けている (No.20200815500)